

28P1-am006

肝再生に伴うコンドロイチン／デルマトン硫酸鎖の産生評価

○土田 和徳¹, 蓑田 俊¹, 大橋 怜¹, 高城 徳子¹, 輿石 一郎¹(¹日本薬大)

【緒言】肝再生時の間質において、肝細胞と細胞外マトリックス糖鎖であるコンドロイチン硫酸/デルマトン硫酸(C/DS)が適切に空間配置されることが重要と考えられる。木全らは、肝再生時に 163kDa と 152 kDa のコンドロイチン硫酸プロテオグリカン(CSPG)が一過性に発現することを免疫化学的に見出している[1]。輿石らは、組織切片を用いた C/DS の *In situ* 定量法を開発し[2]、肝臓の繊維化における C/DS の質的量的変動を見出している[3]。今回、我々は *In situ* 定量法を用いて、肝再生（肝組織再構築）時の間質における C/DS の質的量的変動を調べた。

【方法】若ラット(9week)と成熟ラット(26week)を部分肝切除を行い、肝再生時の組織切片を EtOH-水で洗浄した後、肝間質 C/DS を *In situ* 定量した。

【結果と考察】肝再生時において、若ラットと成熟ラット肝間質の C/DS は質的量的な違いが見られた。若ラットの肝再生時には C/DS 含量が上昇し一時的に SE ユニット(GlcUA-GalNAc4,6S)の比率が減少した。一方、成熟ラットの肝間質 C/DS 量は減少し続け、SE 比率は変わらなかった。若ラットにおいて SE ユニートをほとんど含まない C/DSs[4]が一過性に発現していた。また、若ラット肝間質においてのみ間質の膨潤が見られ、シヌソイド間質が再構築されていることが示唆された。肝間質に固定された C/DS の質的量的変動は肝再生における組織再構築能力を判断する簡易な指標となる可能性がある。

【文献】[1] Yada, T *et al. J. Histochem. Cytochem.* **44**, 969-980, (1996). [2] Koshiishi, I. *et al. Anal. Biochem.* **267**, 222-226. (1999). [3] Koshiishi, I. *et al. Arch. Biochem. Biophys.* **370**, 151-159. (1999). [4] Koshiishi, I. *et al. Biol. Pharm. Bull.* **16**, 335-339. (1993).